

## 平和の尊さと苦しかった戦争当時の思い出

五十嵐 巖（大正 10 年生まれ）

あの悲惨な戦争が終わって早や 60 余年の歳月は矢の如く流れて、今は遠い彼方に消え去ろうとしております。全世界が共に平和を願う今日、日本も今平和の光が輝いております。この平和の世に命長らえて幸せに暮らせていただく事は、平和がどんなに尊いかが、身にしみて感じて来ます。

私達の青春時代は、太平洋戦争が始まり日本の敗戦が近い昭和 18 年 4 月 10 日に新発田市歩兵第 16 連隊に入隊を命ぜられました。その頃、新発田第 2 師団歩兵第 16 連隊は南方ガタルカナル島で、連隊長以下 2,000 名の兵士が玉砕されております。私達はその補充要員として入隊し、毎日厳しい訓練を受けて、9 月に南方ビルマの戦場へ出勤を命じられたのです。

インパール後方、バーモの戦場は日本の飛行機は 1 機も飛んで来ない。連合軍の戦闘機や爆撃機は朝から夕方まで飛来しては爆撃していく毎日の激しい戦闘に、入隊以来苦楽を共にした戦友は日本の平和を願い、郷里を思い浮かべつつ桜花のように散って逝った戦友に心から冥福を御祈り申し上げるのみです。

あの昭和 19 年 12 月、バーモの戦闘に第 16 連隊 2 大隊は連合軍に包囲され、前進も後退する事もできない。後方連絡は無電のみ。弾は減り食糧は乏しくなる。最後の兵まで奮闘せよと命令が来ている。中隊では斬り込み隊が結成され、自分を含めた 3 人で敵の陣地へ決死隊として斬り込む事に命令が出た。小銃に弾 5 発、手榴弾 5 発携行。朝 5 時、大隊砲の支援射撃開始と共に敵陣地に突入するため、夜に行動開始。真っ暗い中、一步一步と敵陣地に近づく。木の葉の露の落ちる音までが敵の歩哨かと思ひドキンとする。ようやく敵の陣地に近づき、友軍の砲が援護射撃を始めた。「さあ斬り込まねば。」と 3 人は別々の敵地へ突入した。飛行機壕の敵陣地へ手榴弾を投げ込む。砲弾と手榴弾の炸裂で落雷の如く。手榴弾を投げ尽したその時に、背中を強く棒が何かで打たれたような感じがした。弾が背中を貫通したらしい。敵兵は後退したのか姿が見えず、これ以上前進は不可能と思ひ中隊に引き返すことにした。他の 2 名はどうしたろうかと案じていたが無事に帰っていた。逆に私の事を戦死したかと心配してくれていたので生きて戻った事を喜んでくれた。

戦況を隊長に報告と共に背中への傷が痛み出してきた。衛生兵の手当を受けたが内臓には異常なしとの事で安心した。

12 月 14 日、最後の日が来た。撤退命令が出た。脱出なるか全員玉砕かの。撤退路のイラワシ河にある敵のトーチカを爆破する爆薬が各兵に渡された。苦楽を共にした戦友達と一緒に死する事が出来ると思えば、暗い心の中からも明るさが出て来る。死の直前になると遠く離れた戦地で、故郷の両親始め皆さんが懐かしく思い浮かんで来る。

野戦病院は閉鎖、残った爆薬の処方等が砲煙うずまく中で進められていく。負傷していても歩ける兵は隊の後尾に付く。後に付けない場合は自決の命令が出ている。12 月 14 日、赤穂義士討

ち入りの日に決行、友軍機が撤退通路を爆撃するとの事なれど友軍機は来ない。遂に友軍機は来ないまま最後の突撃が開始された。敵兵も砲撃を始め、落雷のような音に耳もはり裂かんばかり。曳光弾は流星の如く見え、迫撃砲はもの凄く破裂する。

敵の砲撃は激しく、石垣のそばに伏せた。爆薬と一緒に飛び出せる体制になったその時、砲弾が着弾。体が棒で打たれたかのように感じた。立ち上がろうとしても立てない。戦友は倒れ、呼べども返事がない。戦死らしい。健在者は突入した。自分について行く事が出来ない。少しは歩ける、自決はまだ早いと思い大隊後方の患者分隊にまわった。戦友の肩を借りつつ脱出に成功したが、大勢の戦友は戦死されている。

昭和 20 年の終戦までにこの中隊だけでも 129 名が戦場で散っておられます。心から御冥福をお祈り申し上げますのみです。

戦時中は物資が不足し食糧は乏しく、とても苦しい生活でしたが、終戦後の日本は戦災復興も進み、今は平和の春が訪れております。この尊い平和の世に命長らえて、貧しいながらもささやかな生活が出来る事に感謝の心で一杯です。